

当コラムの新テーマ「食と歯の健康で、病気を知らず！」

第6回目は、前月号で採り上げた「歯科治療の未来像」という点について、もう少し掘り下げたお話をしたい。

前月号では「歯列矯正」という具体例を下敷きに、歯科治療の将来像について思うところを少し述べさせていただいた。

従来のワイヤーが目立つ「歯列矯正」から、デジタル造形されたいわゆる「デジタル・マウスピース」を使った歯列矯正へと、歯科治療（歯列矯正）も時代のニーズや、最新技術を探り入れたイノベーション（革新的変化）が進んでいることを、例を示してお話しかったのだ。

歯科という診療科は、歴史的にも、他の診療科に比べ、かなり革新的変



化に富んだ分野だと思ふ。

今では、我々歯科医が、日常的に用いる治療手段や治療法の多くを、先人たちは、その安全性や治療効果などをそれぞれの時代のニーズを先取りするいわば「進取敢為」の精神で、積極的に患者のために導入してきた。例えば、歯科麻酔、あるいは当コラムでも時々お話しするインプラント治療などがある。

歯の治療の際、必要に応じ麻酔をかけることが、当たり前でなかった時代、のことも想像することは容易



気がつくくと「歯を食いしばっている。…。心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては『噛みしめ』が原因だった』をお読みいただきたい。『未病』の原因をまとめた良書です。

食と歯の健康で、病気を知らず！⑥ 歯科でのイノベーション

くないが、患者さんのためとはいえ、はじめは相当な覚悟や、新技術、技法への不安感（当局の承認や認可などが整備されていない時代の話である）などを先人らはどう克服していたのか。

インプラント（アゴの骨に金属を埋め込む）などは、骨に穴をあけ、金属を埋め込むというスタイル、金属で骨をくつつける技術は、その後、整形外科分野などの「骨を金属でくつつける」という治療法として進化していったことは、一般にはあまり知られていない。「歯科発」の治療法というのは、かなり多いのだ。

結果的に、歯科と言うのは、今も昔も、患者さんにとって、一番身近な「クリニック」であることに変わりはなく、今後も医学会で広く普及していく余地を有する、未知の治療法や、治療手段が生み出される可能性を秘めた診療科となるだろう。

患者さんに身近だからこそ、最新の患者さんの「ニーズ」に出会う機会もそれだけ多いとも言える。

そのニーズをしっかりと汲み取るのは、もちろん我々歯科医の使命だ。前月号でも紹介した歯列矯正用の「デジタル・マウスピース」（3Dプリンタを用いて作る）は、私のクリニックで今後、治療に使っていく予定だが、これなども「時代のニーズ」を一人の歯科医として、私なりに先取りする小さな試みの一つでしかない。

一人の歯科医ができることには当然限界がある。だが、先人たちも、突然大きな成果や、発見を成したわけではあるまい。

時代、患者さんの声なき声、気付かないニーズを、探り当て、見極め、カタチにしていく。歯科医一人ひとりの「イノベーター」（変革者）としての意識、その高さ、強靱さが、未来の歯科医療をより良いものに変えていくのである。

亀井英志（かめい・ひでし）

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒業。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

